

魔法の Wallet プロジェクト 活動報告書

報告者氏名：矢野恭裕 所属：京都市立桃陽総合支援学校

記録日：2020年2月17日

キーワード：学習保障・学習意欲・自己肯定感・遠隔教育

【対象生徒の情報】

○中学部2年 男子生徒14歳

○障害と困難の内容

□病弱

桃陽総合支援学校は、京都市にある病弱の特別支援学校である。学校隣接の京都市桃陽病院に入院している小中学生が通う本校と京都市内の5つの病院（京大病院・京都府立医大病院・国立医療センター・第二赤十字病院・京都市立病院）内にある分教室と5つの病院以外に入院している小中学生のための訪問教育がある。

・本生徒は、原籍校での中学校生活を順調に過ごしていたが、一昨年12月頃体調不良を訴え、即日検査入院した結果、病気が分かり入院生活が始まり、当校の分教室に在籍した。

○入院当初は、治療や体調により分教室への登校が難しく欠席が多く、体調の良い時は病室で個別に1時間ほどの授業を行うことが多かった。

○治療の関係で病室から出られない時期が多く、交流する人が限られている。特に、同年代の子ども達との交流が少ない。

○突然の入院で日常生活から切り離されたことにより、原籍校の情報が少なくなり、学習や復学に向けて不安を抱いている。

【活動目的】

・当初のねらい

(1) 原籍校への復学、退院後の生活を見据え、体調に合わせてながら継続的に学習を行う。

(2) 本校や分教室と交流を行い、同世代との関わりを増やし、学習や行事において役割をもち、自分のできることを見つけ自己肯定感を高め、学習や治療への意欲を向上していく。

【*ねらいの修正】

→本校や分教室と合同学習を行い、同世代との関わりを増やし、学習や行事において役割を持ち、仲間との共感・共有を通して自己肯定感を高め、学習や治療への意欲を向上していく。

(3) 原籍校との連携をとりながら、スムーズな学校生活への移行ができるようにする。

・実施期間 2019年4月～継続中（本生徒は1月31日退院）

・実施者：①矢野恭裕 ②木邑佳織 ③森山恵
④大杉仁彦 ⑤分教室（分教室）教科担任

・実施者と対象生徒の関係

① 本生徒担任（社会科担当）

② 当校副教頭 ICT・アプリの導入、学習サポートとして関わっている。

③ 当校研究主任 共同研究者（音楽科担当）

④ 当校支援部 「育」支援センター教員【地域支援コーディネーター】

⑤ 国、数、理、美、技家、英、各教科6名

【活動内容と対象生徒の変化】

対象生徒の事前の状況

- ・原籍校での学校生活は活発に過ごしていた。部活動はサッカー部に所属。休日は部活の他に友達と遊びに行くなど積極的であり、クラス内での人望も厚い。
- ・授業中なかなか集中できず、定期テスト前の勉強もやったことがないと話していた。

【学習形態・状況に関すること】

- ・入院当初から病院内での学級では、中学生は一人で同世代との関わりのない状況である。
- ・治療内容や体調により病室から出られないが、病室では学習できる体調の時がある。その際、桃陽の教員がベッドサイドに行き、1日30分～2時間の学習を受ける。(入学当初はベッドサイド学習が多かった)
- ・学習意欲が低く、集中できる時間が1時限(50分)の中で、20分ほど。授業以外の内容については授業者との会話を楽しむ。
- ・治療に対し見通しを持つことができず入院・治療も受け入れられない日が続いていた。今年度の初めに治療の見通しがたち、前向きに入院生活を送ることができてきた。

【コミュニケーションに関すること】

- ・普段は病室から出ることができないことが多く、また同病院内に同年代の生徒がいないので、話す場は少なくなっている。
- ・中学生が1人であり、小学生の兄的存在として普段から同病院に入院している小学生と楽しくゲームをしたり、話したりしている。



・活動の具体的内容

(1) 継続的な学習に関すること

「病気療養中でも、どこでも学べる学習機会を作っていこう」

本生徒は、入院当初、治療や体調により病室から出られない時期が続き、分教室への登校もできていなかった。さらに病室で学習はできる体調であっても、学習意欲が低く桃陽の教員が病室へ行き学習をしようとして働きかけても、1日30分～1時間の学習を行うことがやっとであった。学習に関すること以外の内容については、話題も豊富で周りを明るくできる印象で、話すことも好きで、教員との会話を楽しんでいた。そこで、彼の良さを生かしながら、授業に対する意欲の向上、また同年代の生徒との交流の機会をもてるように、桃陽が今まで行ってきたテレビ会議システムを使うことにした。病室と他の病院の病室、病室と分教室をつなぎ、集団での授業やレクリエーションなどを行った。

ア 分教室(ベッドサイド)や本校を繋いだ学習



NTTが開発したテレビ会議システム。京都市のネットワークで京都市の小中学校等で活用可能。当校では、「テレビ会議」と呼んで、日常的に使っている。これまでの当校の研究事業により、5つの分教室と一部病室でも使用可能である。現在、本生徒の病室では京都市のネットワークがないため、病院の許可を得て4G回線を使用している。

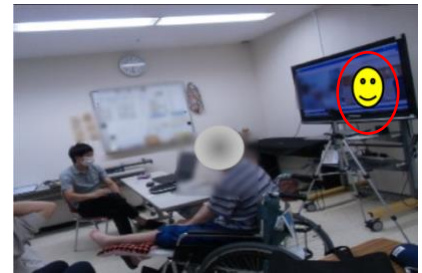
- 今年度は他の分教室の生徒においても、同世代との関わりが少なく、学習集団の確保やコミュニケーションについての課題があったため、テレビ会議システムを使って繋いだ授業を計画的に組み入れた。総合的な学習の時間や自立活動や全校集会などは今までも繋いでいたが、常時繋いだ授業を行えるように、まずは先行して担当教科の社会をつなぐようにした。また、本校の担任とも連携して、道徳もつなぐようにした。常時つなぐことで、「聞こえにくい」「画面が見づらい」「しんどい」など生徒の反応が悪い場合は、取

組を検討しようと思っていた。しかし、生徒たちの反応は良く、病院の中でも友達と学習ができることについて喜んで見られた。音楽、美術、技術家庭などの教科から時間を増やしていき、他者との関わりを重視した取組を学校全体で行った。現在はどの教科も繋いだ授業を試行的に行なっている。

【テレビ会議で繋いだ図】



本生徒は対面での授業も少しずつ前向きに取り組めるようになり、集団での授業では、他者と話をすることが好きということから積極的に参加していた。自分が伝え意見などが認められたことや、他生徒と接することが楽しみとなって、学習意欲の高まりにつながっている。また授業以外の時間に自らマイクを押して、テレビ画面越しに日常会話をしたり、悩みを相談したりすることもあった。



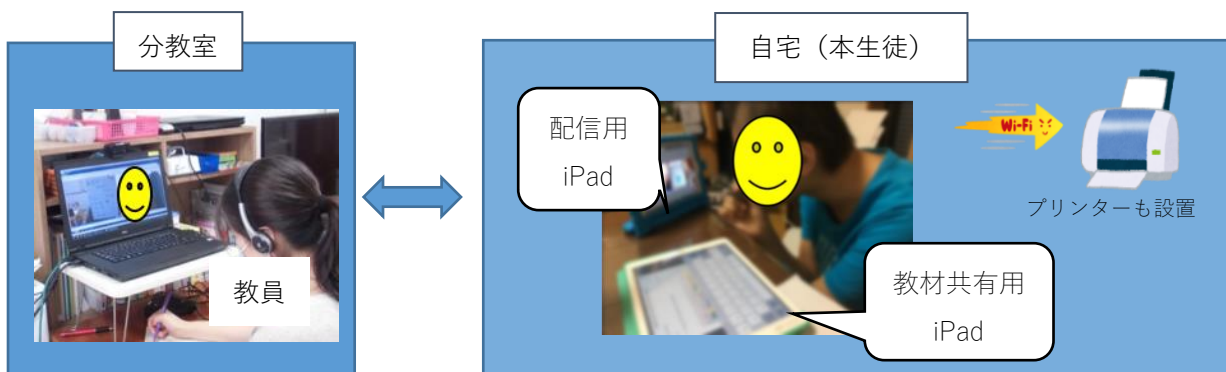
【休みに時間に繋いで話している様子】

イ 自宅療養(一時退院)中の取組

生徒は9月に治療の経過で自宅療養になった。学校長や保護者と相談して、自宅での配信授業を受けられるようにした。機器の設定や使い方のレクチャーに桃陽の教員が自宅へ行った。その際、配信を受けることで出席日数になることも本人・保護者に説明をした。環境は整ったが、学習意欲が低い本生徒が、果たして自宅からテレビ会議をつけて参加することができるのか心配だった。

しかし、実際、生徒は毎日自分で9時半にテレビ会議をつなぎ入ってきて、ほとんどの授業を受けることができた。その日に学習するプリントはメールで受け取り、すぐに自宅に設置したプリンターで印刷して使用した。各教科の授業はもちろん、一時退院中に行われた学習発表会の練習も一緒に行った。

【自宅への配信の様子】



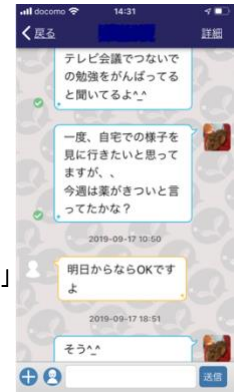
～日常の連絡方法について～

夏休み中、自主学習について何かわからないことがあればいつでも教員との連絡がスムーズにできるようにと、本生徒に貸している iPad に「By Talk for school」を入れて使い方を紹介した。夏休み中、iPad を開くこともしていなかったという事で教員と本生徒は連絡を取り合うことはなかった。基本的な連絡のやりとりは毎日放課後、分教室の担任と行っているの、それほどお互い使う必要がない状況であった。

しかし、9月初旬からの自宅療養では、「By Talk for school」で連絡を取り合い、自宅と分教室を結ぶ連絡手段として体調のことを尋ねたり、学校の様子を伝えたりして連絡を取り合った。



アプリ「By Talk for School」



ウ 自主学習に向けて

①授業動画配信サイト「palstep」の活用

「palstep」は、SB プレイヤーズ株式会社が提供している生徒一人一人の学習レベルに応じて学習を進めることができる小中学生向けの e ラーニングシステム。



学習意欲が高まったことにより夏休みに向けて自主学習の方法を身に付け、さらに学習意欲を高めてもらいたいと考え国語、数学の学習で8月初旬に「palstep」を紹介した。一人で自信を持って学習を進められるように、本生徒と相談して下学年の国語・算数から進めていくように夏休み序盤にやり方を一緒に確認した。しかし、本生徒は夏休み期間、国語・数学の学習で「palstep」の使用はしていなかった。

②授業動画配信サイト「スタディサプリ」の活用

スタディサプリは、リクルートマーケティングパートナーズが運営している授業動画配信ソフト。研究事業にて当校で試験的に使用している。



「palstep」と同じく授業動画配信サイト「スタディサプリ」の活用についても説明をした。「CM でみたことがある。」と話して興味を持ち、「ユーチューブのように見ていいかな？」と話していた。「palstep」よりも興味を持っていたので、自主学習を行うかもと期待したが、夏休み中は一度も使うことはなかった。

①②とも一人でするようにと勧めただけでは難しかったと考える。

(2) 自分のできることを見つけ自己肯定感を高める取り組みに関すること

6月上旬にあった運動会で今年初めて分教室も本校と一緒に参加することになった。その運動会で本生徒は分教室での総合司会を務めた。担任と司会原稿を作り、一緒に競技の順番を確認し、「ここは時間を置いた方がいい。」「点数を表示した方が小学生などにはわかりやすい。」など他者への気配り、配慮を考えるなど与えられた役割以上のことを行うことができていた。当日は予定していた競技時間の遅れなどもあったが、動揺することなく、練習通り総合司会を務めることができた。最後まで責任を果たすことができたことにより、これまであまり褒められた経験がなかったことから自己肯定感が高まったと考えられる。



【本校と分教室を繋いだ運動会の様子】

また、本生徒はとても思いやりがあり、優しい一面がある。分教室集會では小学生のお兄さん役として声をかけている。みんなからとても慕われていて、授業以外の時間にもよく遊んでいる姿も見かける。長い入院生活の中で、分教室の中に自分の役割があり、居場所があるということとは治療や学習への励みになると感じている。また、TV会議システムを使って、自分から声をかけてUNOを楽しみ、1日の学習の楽しみとして交流している。



【分教室集會での様子】

(3) 原籍校との連携に関すること

原籍校との連携に向けて、年度当初、桃陽の担任から「今後行事などで連携をとりたい」という事で話をした。原籍校も『できることは協力をしていきたい』という事で話をした。4月下旬にあった休日参観、6月上旬の運動会では、実際に本生徒の活動の様子を参観していただいた。

1月中旬に行なった復学カンファで、まずは病棟から今後の外来受診や登校に向けて、登校した際の対応についての共通理解、本人の意向などについて話し合いを行った。具体的な連携としては、退院後、すぐに学校には通えないという状況なので、外来受診で登校が可能となるまでの自宅療養の際、自宅と中学校をテレビ会議システムでつないで学習できることや、学習以外で友達と話す機会を設けることなどを提案した。中学校、保護者とも了解を得ている状況である。

【報告者の気づきとエビデンス】

・主観的気づき

- ・ICTの活用により、場所が変わっても継続的な学習が可能になり、出席日数につながったのではないかな。
- ・ICTを活用して分教室の同世代の仲間とのつながりを持ったことで、学習や行事に対する意欲が向上したのではないかな。

・エビデンスとエピソード

(1) 継続的な学習に関すること

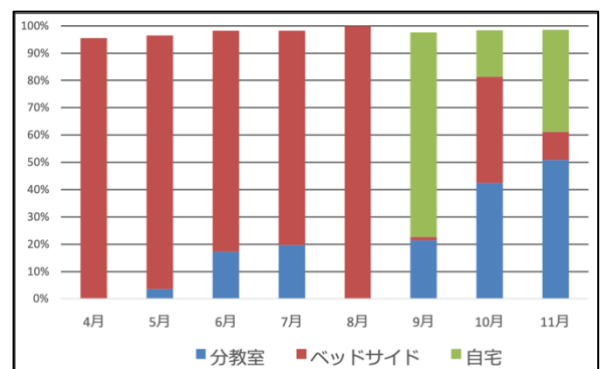
入院当初は病室での対面授業を行っていたが、学習に対する意識が低く、短い時間の学習が続いた。マンツーマン授業での取組は効果が薄いと感じ、4月からの取組として、単元内容や教科内容が違ってもTV会議システムを使い、同学年の生徒とつないだ。また授業前や授業後、自由に他生徒と話す時間を設けた。本生徒は他者との関わりがとても好きで、あまり話好きでない他の入院している生徒に対しても気さくに話しかけていた。話しかけられた生徒の反応を本生徒に教員が伝えると、『もっとつないでほしい』『みんなでUNOとか遊びもしたい』など自ら進んで行事や取組を提案する姿が見られた。本生徒が提案したUNOは夏休み前の分教室の中学部集會で、TV会議システムごしに4つの病院をつないで行った。

生徒の4月から11月までの出席日数の状況を右のグラフ1に示した。分教室・ベッドサイド・自宅と学習する場所は変わっても、継続的に出席できたことがわかる。

平成30年9月に文部科学省の通知において自宅療養中



要出席日数に対する総学習日数(4~11月)



グラフ1

* 要出席日数を100%とする

においても出席が認められる要件を満たしているため、本校での出席扱いとした。また、グラフ2において、要出席時数と総学習時数との比較を行った。テレビ会議でつなぐことによってそれ以外の時間も学習でき、学習時間を確保できたことがわかる。

さらに、自宅療養が続いた9月には、ほとんどの授業を配信にて受けたこともわかる。自宅療養中は、比較的体調がよく、学習に向かいやすいことも分かる。保護者も「一時退院で体は元気なのに欠席するしかできないのかと考えていた際、このようなシステムがありよかった。」と話されていた。

TV会議システムを使い、他者との関わりの中で発表など通して、役割を務め上げ達成感を味わえたことで昨年度は出席しても午前中1時間の病室での学習であったが、今年度のGW明けからはほぼ1日授業に参加できるようになっている。また授業時間の大幅増により、それぞれの教科授業での成果も少しずつ目に見えて確認できた。具体的には5段階評価の成績が昨年度学年末から、9教科トータル5成績を伸ばした。同世代をつなぐという様々な取組から学習に対する意欲が高まっていると考えられる。

また、本人も「勉強はあまり好きでないけど、みんなで学習できることは楽しい。TV会議を通して実際に会うことはできなくても、みんなと話ができることは楽しい。」と話していた。

今後も学習意欲の継続においてTV会議システムを使い学習や様々な行事を分教室内で行いたいと考えている。

(2) 自分のできることを見つけ自己肯定感を高める取り組みに関すること

学習意欲の継続同様、これまでは『自分ではできない』と決めつけていたことが多く、生徒も「最初から拒否をしていたことが多かった。」と話していた。自分自身がこれまでできないと決めつけていたことが、やってみたら、できたという発見が他の生徒や教員との関わりで見つけることができたこと、TV会議システムで他者との関わりで協力してできたことなどにより、現在の学習時間の大幅増やさまざまな意欲向上につながっている。この状況を継続していきたいと考えている。

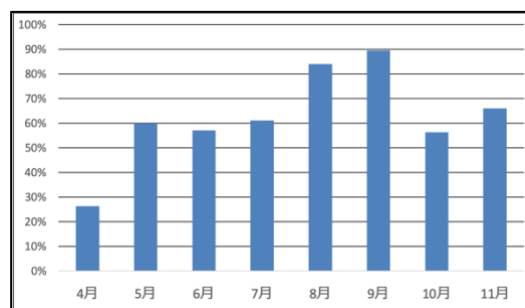
また授業配信動画などのアプリを使っただけの夏休みの学習は行うことができなかったが、みんなと同じ課題、特にみんなに見せる課題については自ら意欲的に取り組むことができていた。このことから、学習や行事などを通して他の生徒と一緒にやったことが彼の学習意欲向上につながったと考えられる。

(3) 原籍校との連携に関すること

本生徒は、治療の影響で少し容姿が変化したが、『気にしない』と話している。明るい性格もあり、原籍校の生徒も本生徒の退院を待ち望んでいる。退院前日に、『俺のことをみんな待っていてくれる』と嬉しそうに話していた。退院の見通しが見えてきたころは、どこか不安感や閉塞感が彼から感じるがあったが、この入院生活でこれからの自分についてしっかり考えることができたことは、自分にとって大きな成長だったと話していた。

退院後も、自宅療養や短時間の登校が続くことが考えられるので、原籍校と自宅をつなぐTV会議システムを使っただけの取組について、原籍校とも復学カンファで確認しており、保護者の了承も得ている。現在、本人の意思としては、TV会議システムを使わず、「学校に行けるようになったら自分で行きたい」という意思が強い。本人の意思を尊重する形で、現在は連携の準備は進んでいるという状況となっている。

要出席時数に対する学習時数（4～11月）



グラフ2

* 要出席時数を 100%とする



【社会科の夏休みの宿題を
取り組む様子】